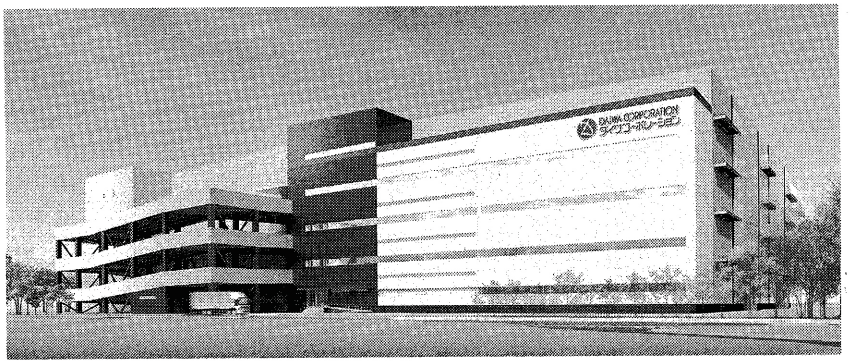
ダイワコーポ

来秋、大型拠点を開設

利便性が最大の強みに



同社最大の物流センターとなる「横浜町田営業所」

ダイワコーポレーション（本社・東京、曽根和光社長）は来年10月、神奈川県大和市に新たな物流センターをしゅん工する。総延べ床面積が9万平方㍍を超える同社最大の施設で、全国配送に対応可能な内陸型の重要拠点と位置付ける。今後は自社の業務と、一部スペースを貸し出すサブリースを並行しながら顧客を獲得し、早期フル稼働を目指す。

（小林　孝博）

横浜町田営業所の所在地は神奈川県大和市下鶴間1742ノ7。敷地面積は約4万1200平方㍍。5階建て、延べ床面積は約9万4700平方㍍。日本生命の「ニッセイロジスティクスセンター横浜町田」を1棟全て賃借する。

交通アクセスの良さが特徴の一つ。新拠点は東名高速道路横浜町田インターチェンジから約3キロ㍍に立地し、首都圏に加え、東北や北陸信越、西日本方面への全国配送が可能。東急田園都市線中央林間駅から徒歩約13分に位置するなど、従業員確保のしやすさにも強みがある。

同社はこれまで湾岸エリアに拠点を保有しており、「内陸に大型物流センターを構えるのは初めて。東名高速、国道16号が隣接する強みを生かしたい」と曽根社長。国際戦略コンテナ港湾の京浜港への利便性も良く、輸出入貨物を含め幅広い業種で顧客を誘致する。

倉庫の使いやすさも魅力に

新センターには上り・下り用のダブルランプウエーを設け、45㌧コンテナトレーラーが直接4階まで乗り入れられる。1フロアごとにバースが2面あり、1面当たり最大18台まで接車が可能。敷地には乗用車の駐車場、駐輪・バイク置き場のほか、35台分のトラック待機場も用意した。

また冷凍・冷蔵機器の設置や重量物に対応できるよう、1平方㍍当たりの床荷重を1階で2㌧、2～5階で1・5㌧で設計。倉庫部分の柱間隔は約11㍍、1～4階の天井高は5・5㍍とするなど使いやすさを重視した。将来的なロボットの導入を見据え、予備電力も確保した。

ダイワコーポはこの数年、横浜港の本牧ふ頭などで積極的に大型物流センターを開設しており、来年秋に横浜町田営業所がしゅん工すると、同社の倉庫所管面積は約69万3000平方㍍となる。

曽根社長は「横浜町田営業所は出羽款取締役営業本部長を中心に、力を結集して進めてきた案件」とし、早期フル稼働に向けて営業を強化していく。

陸運、倉庫が伸長

渋沢倉庫

消費財など荷量増で

渋沢倉庫（本社・東京、大隅毅社長）の平成30年4～9月期連結業績は、売上高が前年同期比2・0%増の323億8000万円、営業利益が同6・4%増の18億4300万円で増収増益だった。

消費財を中心に物流の取り扱いを伸ばしたことや、不動産事業の賃料、管理業務が拡大したことで増収。営業利益は荷量増加によるコスト増はあったが、横浜地区の物流施設がフル稼働し、売上高を同4・1%伸ばした。

ビル賃料の改定も寄与

営業利益はグループ子会社の燃料費、人件費、

映像検品装置で特許を取得

日立物流

日立物流（本社・東京、中谷康夫社長）は、